

# かかわりを大切にした支援のあり方について

— 養護学級高学年「かざりを作ろう」の実践から —

関 和 典

## 1 はじめに

児童が何かの創作活動をするとき、今までの経験や既習の事柄を利用することは言うまでもないが、実際にその時点で一緒に活動しているクラスメートの活動している様子や指導者の支援がその児童の活動に多大な影響を与えていることが多い。

日常の中でも同じようなことが言える。ある児童が友だちや教職員から得るものは、とても多いと考えられる。そういった環境は全く自然に構成されていることはまれで、実際には某かの必然性に基づいて集団が構成され、その中で学習が構成されていることになる。

本学級では、「生活力のある児童」として3つの力を掲げているが、その中でも「さまざまな集団やいろいろな人とかかわり合いの中で生活や学習をする力」というものにスポットをあて、今年度の研究を推進していく。この力を具現化するものとして、私は以下の3点を考えている。

- ① 児童が自己を表現することがができるような肯定的な環境（学級経営）が存在している。
- ② 児童がかかわり合い影響し合う友だちや指導者が身近にいる。
- ③ 児童がかかわることを促進するような適切な具体物（教材・教具）がある。

①については、学習環境としての単位である学級が、自分の意見を肯定的に評価し、自分の思いが十分に反映されながら学習が展開していくということを意味している。②については、友だち同士のかかわりや、指導者を介しての友だちとかかわりを意味している。③については、主として実際に学習を行う際に児童に提示する具体物や教材・教具等を意味している。いずれにしても、この要件を確実に実現することが「かかわり合いながら学習をする力」につながっていると考えている。

## 2 本題材「かざりをつくろう」の実践について

### (1) 題材についての基本的な考え方（研究仮説）について

児童は、お話しの時間の発表の場として、クリスマス会を年末に企画・運営している。その中で、児童が年末の雰囲気やクリスマス会での雰囲気作りのために教室を飾りつけすることが毎年の恒例となっている。児童はこのことについては見通しをもって活動することができる。本実践では、図画工作科としての「かざりを作ろう」の中で児童が他者やものとかかわることを通して、自分が活動をしていくことをどのように見通し、どのように活動を選択・決定し、自分のしたことに対していかに達成感・成就感をもつことができるかということを検証していくものである。指導に当たっては、児童が他者やものとかかわることができるような環境、友だちを意識することができるような場の設定、見通しをもちやすくかかわりの必然性のある教材・教具について工夫し、それが有機的に機能しているかということについて常に考慮していく。また、本学級で作成している表について、その表の〈集団とかかわり〉と〈選択についての実態〉とを結ぶ線がその児童にとって適切な支援であるかということについても検証を進めていく。

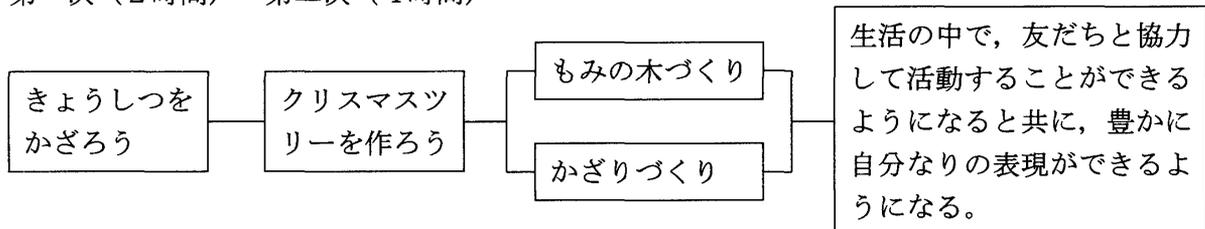
## (2) 児童の実態について

本学級の児童の実態については、本学校が独自に作成した表をもとに表現していきたい。例えば児童⑪について説明すると、選択についての実態が「好き嫌いの好みの視点が明らかになって選んでいる」という実態がある。集団へのかかわりについては「友だちの動きを手がかりに活動する」という事態である。このときの児童に対する支援は、両端の⑪を線で結んだところにある支援「模倣できる場を多く設定する。」という支援が妥当ではないかというように考えている。他の児童も同様に支援をこの表をもとにして設定していく。これは目標行動のもととなるものである。

〈選択についての実態〉	〈 支 援 〉	〈集団へのかかわり〉
偶然手にした方を選んで いる。	・児童が好んでいるものを選択肢にする。	指導者といっしょに活動 をする。
友だちや指導者の模倣に よって選んでいる。	・選択肢のイメージをもつこ とができる具体的な手がが りを示す。	指導者のことばかけで活 動をする。
好き、嫌いの好みの視 点が明らかになって選ん でいる。⑪ ⑮	・模倣できる場を多く設定 する。	⑪ ⑮ 友だちの動きを手がかり に活動する。
友だちや指導者の活動へ の関心から選んでいる。	・児童が特に好んでいる活動 の中での選択場面を設定す る。	⑩ ⑫ ⑬ ⑭ 集団での活動の仕方がわ かり自己主張しながら友 だちとかかわって活動す る。
友だちや指導者の活動を 見て見通しをもった方を 選んでいる。⑬⑭	・児童が課題と捉えているこ とについて課題達成までの 見通しをもつことができる ような具体的な手がかりを 提示する。	⑩ ⑫ ⑬ ⑭ 集団での活動の仕方がわ かり自分と友だちの考え を比較し調整を図りなが らかかわって活動する。
過去の経験から見通しの もちやすい方を選んでい る。 ⑫		
自分にとって乗り越えな ければならない課題の有 無で選んでいる。⑩		

## (4) 指導内容と計画について

第一次（2時間） 第二次（4時間）



### ① 第一次での取り組みについて

第一次では、クリスマス会に向けて、教室を飾るということから児童の意識づけを行った。まず年末の町中の様子をVTRに撮り、児童にクリスマスの飾りつけについてどのようなものがあるかということを視覚的に提示することとした。更に、いろいろなクリスマス飾りがある中で、児童がイメージしやすく、今までもつくった経験のある「クリスマスリース作り」を制作することになった。

リース作りは、ダンボールにマカロニを木工用ボンドで貼り付けて、金銀のスプレーを吹き付けるという工程で行った。また、自分たちの拾ってきたどんぐりや紅葉した葉も付けていった。

児童は、興味をもって行った。作品を教室に掲示すると、これまでの経験からクリスマスツリーをつくることも何度もことばにして表現している児童もいた。そこで、次時では「みんなでクリスマスツリーをつくらう。」ということになった。

### ② 第二次での取り組みについて

第二次では、前時の児童のことばを受けてクリスマスツリーを作ることにした。ここでは前時に制作したリースが個々のものだったのに対して、みんなで一つのクリスマスツリーを作っていくことにより、児童の自然なかかわりをもつことをねらっていた。

そのために、ツリーの枝作りからはじめ、ひとりで複数本の枝を作ることで、自分の枝以外に飾りを付けていく際に児童同士の会話やかかわりが生まれてくるのではないかと考えた。更に自作のツリーの幹を作り、それをろくろに載せて児童全体が見えるようにした。そうすることで、児童が一つの枝に自分のつくった飾りを集中して付けることがなくなり、他の児童がつくった枝にも飾りを付けていくことができ、その際にもかかわりが生まれるのではないかと考えた。

### (5) 第二次第1時の授業について－仮説－

以上のように、児童が自分たちの活動を行う中で、ひとりのイメージをふくらませながら活動するだけでなく、児童同士のかかわりをもつための取り組みとして以下の仮説を立てた。

児童が互いにかかわることができるようなことばかけや場の設定を行えば、児童は互いにかかわり合いながらかざりづくりを行うことができるであろう。

### (6) 目標行動について

上の仮説を実証するために、児童一人ひとりに対して第二次第1時における目標行動を以下の表のように設定した。児童⑩については自分の思いを全体場で表現することができるように、児童⑫⑬⑭については、他の友だちの良さを知りそのことを自分の活動の中で活かすことができるようにすることを、児童⑪⑮については、ものとかかわりを中心に、見通しや模倣をねらうこととした。

目 標 行 動	指 導 者 の 支 援	児 童
ツリーづくりについての考えや作り方を全体場で発表することができる。	児童のつぶやきや作り方を発表するようなことばかけをする。	⑩
ツリーづくりについての考えや作り方を友だちの行動から知ることができる。	友だちの考えや作り方を全体場で紹介する。	⑫⑬⑭
ツリーづくりの具体的な活動を具体物や友だちの行動から理解することができる。	ツリーづくりに必要な具体物を提示したり、友だちの行動を言語化したりする。	⑪ ⑮

(7) 学習の展開について

学 習 過 程	予想される活動	指 導 ・ 支 援 活 動	
		全 体	個 別
1. はじめのあいさつをする。	1. ・当番児童⑩がすぐに出て来るであろう。	1. ・学習の始まりとして毎時間位置づける。	1. ・当番児童⑩には出てきたことを賞賛する。
2. 前時までのツリーを見る。	2. ・本時の内容を理解しているであろう。(児⑩⑫⑬⑭) ・ことばかけだけでは理解することが難しいと思われる。(児⑪⑮)	2. ・今までの学習を振り返ることができるようなことばかけをする。 ◎今日も、みんなで一つのツリーを協力して作ることを告げる。	2. ・児⑩⑫⑬⑭には聞き出すようなことばかけをして他児のモデルとする。 ◎児⑪⑮には、具体物を提示したり友だちの発言を聞いたりする。
3. かざりをつくる。	3. ・素材を見てイメージしながらつくることができるであろう。(児⑩⑬) ・つくりにかたをどうしていいか迷うことがあると思われる。(児⑫⑭) ・つくりたいものをすぐに決めることが難しいと思われる。(児⑪⑮)	3. ◎自分のつくりたいものを聞き出すような支援を行う。その際全体の中で言語化して他の児童にも広げていくようなことばかけをする。 ・のりやはさみの使い方について適宜指導する。 ・児童全体がいろいろな素材とかがわかることができるよう置く位置を配慮する。	3. ◎児⑪には何をどのようにつくりたいのかを尋ねて、全体の中で発表するようことばかけをする。 ◎児⑬には指導者が言語化する。 ◎児⑫⑭には他の児童がつくっているところを見るようにことばかけをする。 ◎児⑪⑮には、実際に具体物を提示する。
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">モール</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">すず他</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">人形他</div> </div>			
4. かざりをつける。	4. ・自分のつくったものを次々に付けていくであろう。(児⑩⑬) ・自分のつくったものを自分のつくった枝につけていくと思われる。(児⑫⑭) ・自分のつくった飾りをすぐにつけて行くことが難しいと思われる。(児⑪⑮)	4. ◎どの枝につけたいかということを探ねながら活動を行うようにする。 ◎児童が自分たちの考えを活かして飾りつけができるように支援する。 ・児童全体がツリーを見渡すことができるようツリーそのものが回るような設定をする。	4. ◎児⑩⑬にはどういうふうにつけたいかということを探ね、全体の中で発表するようことばかけをする。 ◎児⑫⑭には、友だちの枝につけることを尋ねるようなことばかけをする。 ◎児⑪⑮には、他の児童が付けているところを見るようなことばかけをする。
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">自分の枝</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">友だちの枝</div> </div>			
5. 全体で鑑賞する。	5. ・自分の作品をことばや指さしで表現することができるであろう。(児⑩⑪⑫⑬⑭⑮)	5. ・児童それぞれがつくったものや、かかわり合った部分を評価する。	5. ・児⑩⑪⑫⑬⑭⑮には、クリスマス会に向けての意欲や期待感を引き出すようなことばかけをする。
6. 終わりのあいさつをする。	6. ・当番児童⑩がすぐに出て来るであろう。	6. ・授業の終わりとして毎時間位置づける。	6. ・児⑩には、出てきたことを賞賛する。

### 3 考 察

#### (1) 互いにかかわることができるようなことばかけや場の設定をすることができたか。

第二次第1時では、児童が他者とかかわることに必然性をもたせるため、クリスマスツリーの枝をそれぞれの児童が複数本担当することと、ツリーのかざり作りをする際に、いろいろな場所にかざりをつけることができるよう回転する台の上にツリーを載せ留という支援を行った。児童は、他の児童が作った枝にかざりをつけるとき、「〇〇ちゃん、ここに付けてもいい？」ということばが出たり、自分でツリーの台を回して「ここに付けた方がいい。」とか「こっちにあいてるところがあるよ。」などというかかわりをもつようなことばかけができた。また、指導者が児童に対して作品を見せ合う時間を設定することにより、児童同士の模倣による作品の広がりを見ることができた。このことから、ことばかけ、場の設定はほぼ適切であったと考えられる。しかし、ツリーが児童の身長ほどあり、対角線上にいた児童の活動が見えなかったことや、自分のつくった枝は覚えていても、他の児童がつくった枝についてははっきりとした表示をしていなかったことは今後の課題といえる。



#### (2) かかわり合いながらかざりづくりができたか。またさらにそのことは自己決定に関わっていたか。

前述したように、児童がかかわり合うためのことばかけや場の設定は、ほぼ適切だったといえる。「みんなの」クリスマスツリーを作るという最初の投げかけも一部の児童だけではあるが理解をしていた。また、他の児童が自分の作品を作る際に、他の児童が作っているものを見て、「いいなあ。」とか「ああいったものがつくってみたい。」と考え、今自分がつくっているものよりもより自分のイメージに近いものを作っていこうとする姿が多く見られた。このことから、児童が自分の作品作りの中で、他者やものとかかわることによって作品の方向性を決定していったということがいえると考えられる。



#### (3) 表による支援は妥当であったか。

児童⑩については、全体の場で考え方や自分の作品を提示するようなことばかけを行うことによって他の児童がその作品をまねて作ることができた。児童⑫⑬⑭については、児童⑩が行っていることや⑫が全体の場で表現したことを他の児童がまねて作品作りの方向性をつくることができた。児童⑪⑮については、具体物を提示することで、作品に対する見通しをもつことができ、他の児童の作品を実際に見ることで、イメージが具現化していき、自分の作品作りに反映されていった。このことから、支援は適切であったといえるが、児童の実態把握の部分でより細かい見取りをすることにより、より児童にあった支援を行うことができると考えている。

### 4 おわりに

今回は、図画工作科の中で、「かかわる」ことを大切にして実践を行ってきた。児童が、作品等の創作活動をしていく際に、作りながら他者の作品を見たり、みんなで1つのものを作るときにお互いが意見を出し合いながらよりよいものを作ったりしていくことが、今後の児童の生活に汎化していくよう今後も指導を続けていきたい。